

がんサバイバーシップ研究助成金

研究報告書

◇国際学会・会議

名称 Digestive Disease Week(DDW)

開催日 2017年5月6日-9日

開催地 アメリカ合衆国 イリノイ州シカゴ McCormick Place

研究発表（口演・示説）ポスター発表

報告者：国立がん研究センター中央病院 内視鏡科 中谷 行宏

今回がんサバイバーシップ研究助成金をいただき、アメリカでの内容をさせていただいた。発表内容としては以下の通りです。

表在型食道癌の治療に関しては、粘膜内に限局したものに関しては、内視鏡切除の有効性が明らかになってきている。しかし、粘膜筋板への浸潤または、200 μ mまでの粘膜下層浅層までの表在型食道癌 MM/SM1 に関しては、リンパ節転移のリスクがあるため、内視鏡治療は相対的な適応とされている。内視鏡治療後、MM/SM1 であった単発の初発表在型食道癌について、脈管侵襲および、長期的なリンパ節転移の有無、5年全生存割合、疾患特異的生存割合について長期的な成績を検討した。107例のMM、22例のSM1の食道癌について、MM浸潤であるが、脈管侵襲のない91例に関しては、20例に予防的な化学放射線療法が行われ、化学放射線療法が行われなかった71例には再発が見られず、予防的な治療を行った20例のうち1例のみに再発を認めた。また、脈管侵襲のあるMM浸潤癌あるいは、SM1浸潤癌のうち、3例にリンパ節再発を認めた。脈管侵襲のないMM浸潤癌は、5年全生存率96.3%、5年疾患特異的生存率100%と良好な治療成績であり、脈管侵襲のないMM浸潤癌は内視鏡治療のみで、治療が完結する可能性がある予後良好な群であることが明らかとなった。

学会発表、学会参加を通して

食道表在癌での治療はアジアでESDが普及しつつあるが、現状本邦が最先端の治療を行っており、治療手技、成績、予後に関して、アジアをはじめとした各国の参加者から質問をいただき、有意義な議論を行うことができたとともに、自らの研究を客観的に見つめ直すよい機会をいただいた。また、各国の発表をきくなかで、日本が果たすべき役割を再認識させられた。大きな会場での発表であっても日本からするとそれほど特徴的ではない発表もあり、日本からのさらなる発表、低侵襲治療の普及活動が必要と感じた。

国立がんセンター中央病院は高度な医療を提供し、レジデントとしては、かなり多くの治療、発表の機会に恵まれた環境である。ただ、給料面ではまだまだ十分ではない部分があり、その補助をしていただける本制度により、学会発表、参加が可能となりました。今後研究をさらにすすめ、論文として形にし、世界的な低侵襲治療の普及に貢献して行こうと改めて感じさせていただくことができました。